

「受験英語」における英文解釈法の歴史的展開

ー伊藤和夫の「構文主義」を中心にー

藤村 達也

1. はじめに

日本では、明治期に始まり現代に至るまでさまざまな英文解釈法が生み出されてきた。外山滋比古は、「彼我の言語のどこがどのように違うかに注意し、それを、なんとか体系化しようとした。そのあとが英文解釈法だったのである」(外山 1979, p. 31) という。英語と構造が大きく異なる言語を持つ日本が近代化を遂げる上で、英語圏の知を効率的に輸入すべく様々な英文解釈法が生まれてきたのは必然であったのだろう。

その拡大を支えてきたのが、入学試験対策としての英語学習および英語指導、すなわち「受験英語」である。明治中期に学術研究と高等教育を日本語で行うことが可能になって以来、英語学習の主な目的は入試合格であり、英語は立身出世の道具となった(江利川 2011)。そして現代に至るまで一貫して英語入試問題の主役は「読むこと」、すなわち英文解釈であるから、日本の英語教育の特徴と変遷を明らかにする上で、「受験英語」における英文解釈法の検討を行うことは不可欠である。

これまでに「受験英語」における英文解釈法を検討した研究として、まず江利川(2011)をあげることができる。江利川は明治から平成にいたるまでの「受験英語」を受験参考書を主要な資料として通史的に分析しており、英文解釈法についても多く言及している。他には、小野圭次郎の著作など代表的な英文解釈法を扱う参考書を分析した速川(1990)および速川(1993)や、南日恒太郎と山崎貞の著作を比較検討した谷・西村(2006)などの研究が存在する。

これらの先行研究は個々の著作の特徴や長所を明らかにしているものの、英文解釈法の研究としては以下の課題が残されていると考えられる。第一に、個々の英文解釈法の影響関係とその歴史的な展開については十分に分析されているとは言えない。第二に、「受験英語」を外部から規定する社会的制度的要因については十分に考慮されていない。「受験英語」は入試合格というきわめて実質的な問題関心のもとで成立しており、入学試験や大学進学をめぐる社会状況といった外的な要因に対して従属的な側面を持っている。このような性質を持つ「受験英語」における英文解釈法が、先行する方法をどのような点で問題視し、それが外的な要因といかに関連してきたのかを明らかにすることで、「受験英語」における英文解釈法の歴史的展開を理解するうえで新たな視座が得られると考えられる。

そのようにして「受験英語」における英文解釈法について考えるうえで重要な存在が、伊藤和夫(1927-1997)である。駿台予備学校の英語講師であった伊藤は主著『英文解釈教室』(1977

年)などで展開した英文解釈法、「構文主義」¹によって広く知られており、「書いた原稿1万ページ、売れた本1000万冊、教え子100万人」(秋山 1997, p. 16)と言われるほどの影響力を持ち、「受験英語の神様」と呼ばれた。

これまでに伊藤の「構文主義」を対象とした研究としては、伊藤の参考書の特徴や意義を検討した前述の江利川(2011)や、伊藤の英語教育論を「教養主義」との関係から検討した藤村(2019)、「構文主義」の特徴や伊藤の人物像に迫った入不二(1995)および入不二(1997)が存在している。しかしながらこれらの研究もまた、上で述べた課題を解決するものであるとはいえない。「構文主義」は後続の英語講師にも大きな影響を与えており、本稿で見ると多くの英語参考書が伊藤を乗り越えることを試みてきた。また「構文主義」は、『英文解釈教室』と『ビジュアル英文解釈』(1987, 1988年)の間で大きな変化を遂げていることが知られている(入不二 1995, 入不二 1997, 江利川 2011)。本稿では、伊藤が「構文主義」以前の英文解釈法をいかに批判し、それをどのように乗り越えようとしたのか(=「伊藤以前」から「構文主義」へ)、「構文主義」が伊藤の人生の中でいかに変化しているのか(=前期「構文主義」から後期「構文主義」へ)、そして伊藤の影響を受けた後続の英語講師が伊藤をいかに批判し継承しようとしたのか(=「構文主義」から「伊藤以後」へ)を分析することで、「受験英語」における英文解釈法がいかに他の英文解釈法と関連し、また外的要因から影響を受けてきたのかを検討する。

2. 「伊藤以前」の英文解釈法

本節では、「伊藤以前」の英文解釈法に対して伊藤がいかなる批判を行い、「構文主義」が生まれるにあたって何を問題としたのかを示す。伊藤の英文解釈法および英語教育論の分析においては、英文解釈法にかかわる三冊の参考書、『新英文解釈体系』(1964年)、『英文解釈教室』(1977年)、『ビジュアル英文解釈』(1987, 1988年)を主に取り上げる(以下、それぞれ『解釈体系』、『解釈教室』、『ビジュアル』と略記する)。また、没後に編集されたエッセイ集『予備校の英語』(1997年)と英語学習法に関する学習者向けの書籍『伊藤和夫の英語学習法』(1995年)を補助的な資料として用いる。

後年の伊藤は、英語教育に「構造的・理論的な対象分析と、対象の構造に根ざし、具体的で効果の保証された方法」(伊藤 1997, p. 12)が不可欠であり、学校の英語教育にはそれが欠けていると述べている。他方で「受験英語」においては、「具体的で効果の保証された方法」が強く求められる。受験勉強を通じて、学習者は入試で出題される初見の英文を読み、問題を解くことができるようにならなければならない。予備校のテキストや参考書に掲載された英文の訳例や問題の解答を教えるだけでなく、「その文章、その問題を解く時のアタマの動きの中から、ある部分を抽出して、それによって次の問題も解けるだろうという希望を与えなければ、予備校の学生は満足しない」(伊藤 1997, p. 166)のである。

「受験英語」は受験生のこの切実な要求に応えることをその存在意義としてきた。そのような参考書の代表的存在に、伊藤が新たな英文解釈法を打ち出す際に念頭に置いていた山崎貞『公式応用 英文解釈研究』(1912)がある。同書は「山貞」と呼ばれ、戦前から長きに渡って多くの受験生に使用されてきた参考書である(江利川 2011)。

『山貞』は、「英文を読む者——殊に受験者——の是非一通り心得て居らねばと思はれる様な

構文成句の一般」(山崎 1912=1925, p. iii)、すなわち too...to や no sooner...than といった「熟語」・「公式」的表現を主として提示するものである。伊藤は、こうした英文解釈法には「熟語表現への過度の傾斜と、日本語を媒介とすることへの無邪気な信頼」があり、「いわゆる公式が、so...that=『非常に...ので』のように、単に日本語への言いかえを示すことで満足していることの背景には、漢文の摂取に見られた『外国語→日本語→事柄』という図式がある」という(伊藤 1977, pp. v-vi)。伊藤は、こうした「熟語」・「公式」的な英文解釈法が「読む」と「訳す」ことを混同していることを批判している。

他方で学校英語においては、英語を「訳す」ことなく「読む」、すなわち「直読直解」することが推奨されているが、「それはどのような頭の働きのなか、何を手がかりとし、どのような練習を積みばその域に到達しうるかの具体的道程を示さずに、念仏のように直読直解を唱えたところで初心者には何の助けにもならない」(伊藤 1977, p. vi) と、そこに具体的な方法の提示がないことを批判する。

こうした問題意識から、伊藤は「訳すこと」と「読むこと」を区別した上で、「英語を読んでいかぎり決してそこから離れることができない基本的な約束」を提示し、「英語を読む際に具体的には頭はどのように働くのか、また働くべきなのか」を示そうとした(伊藤 1977, p. vii)。

伊藤がこのように「山貞」や学校英語を批判する理由は、丸山眞男の提示する英語学習法に対する批判から伺うことができる。伊藤は、丸山による「何でもいから自分の実力で比較的容易に読める本を選んで、それを頭から読んで行くのです。という意味は、一々文法を考えたり、この関係代名詞はどこにかかるかというようなことを一切考慮しないで、英(独仏)語から直接内容を理解するにつとめる」(丸山 1949=1995, p.157) という学習法を、以下のように批判する。

この文章はすでに相当の学力をそなえた旧制高校生を意識して書かれたもので、そのかぎり過去においては有益な助言であったろう。しかし、(中略)ここで言われているのは「頭がよければいつかは英語が読めるようになるだろう」ということにすぎない。

たしかに、一部少数の最優秀の学生は、どんな複雑な現象の中からも自分の力で意識的無意識的に法則を見出してゆくことができる。しかし、大多数の学生は、「一度読んで分らぬところがあっても、それに拘泥しないで、もう一度そのパラグラフのはじめから、少々テンポを落してゆっくりと読み直す、それでも分らなければ更にゆっくりと読み直し」(前掲書) ところでわからぬことは同じだし、「自分の実力で比較的容易に読める本」など、はじめからないから困っているのである。(中略) 可能な場合には法則から現象を理解させるのでなければ教えるというに値しない。(伊藤 1997, pp.10-11)

文法を意識せずに英文を多読するというこの学習法は、伊藤自身も経験した方法であった(伊藤 1997)。しかし、伊藤も述べているとおり、丸山の助言が念頭に置いているのは、まさにかつての伊藤のような旧制高校の学生であり、高等教育がごく一部のエリートのみに限られた時代において有効な助言であったといえよう。一方、伊藤が『解釈体系』を執筆したのは 1964 年、『解釈教室』は 1977 年のことである。1960 年代後半には第一次ベビーブーム世代の高等教育

進学期であり、大学進学率は大きく上昇して 15%を超えた。一握りの優秀な学生のみが高等教育に進学していた戦前と異なり、もはや「熟語」・「公式」を覚え、ひたすら多読することで、無意識的に英文の構造を規則化することを、学習者に期待することはできなくなった。このような受験生をも対象としたうえで、知識と実際に英文を読むこととの間の懸隔を埋めることができる、より明示的かつ具体的な英文解釈法が必要だと考えられたのである。このような背景のもと、「構文主義」という方法が要請されたといえる。次節では、この「構文主義」の特徴を検討し、その変容を辿る。

3. 「構文主義」の変化

「構文主義」の特徴は、少数の原理によってあらゆる英文を体系的に分類・分析する点と、英文を読む際の思考プロセスを具体的に提示する点の二つにある（藤村 2019）。前者の原理とは、第一に「S,V,O 及び C が作り出す文の骨格の適確な把握」、第二に「M と H、修飾語と被修飾語の関係を正しく理解すること」（伊藤 1964, pp. 2-3）である。すなわち、主語と動詞を中心とした「S+V+ [X+X]」という構造と、非修飾語と修飾語の「H+M」という関係の枠組みであらゆる英文の構造を分類、解説し、学校文法とは異なる体系のもとで様々な文法項目を新たな視点から捉え直すことを目的としている。

後者の特徴は、「直読直解」（伊藤 1977, p. vii）への志向と言い換えることができる。伊藤は、前節で見た「熟語」・「公式」派のように英文を「訳す」とことと「読む」ことを混同することなく、日本語を介在させずに「英語を読む際に具体的には頭はどう働くのか、また働くべきなのか」（伊藤 1977, p. vii）を示すことを目指した。

「はじめに」で述べたように、伊藤は『解釈体系』（1964 年）および『解釈教室』（1977 年）（＝前期）と『ビジュアル』（1987, 1988 年）（＝後期）の間で、英文解釈法の指導方針を大きく転換させている。本節では、「構文主義」がいかに変化したのかを検討し、そこにどのような要因が存在したのかを検討する。

第一に分析するのは、参考書全体の構成とその変化である。まず『解釈体系』の目次を示す。

第 1 章 文の基本要素	第 6 章 形容詞的修飾語
第 2 章 基本要素の拡充 (1)	第 7 章 副詞的修飾語
第 3 章 基本要素の拡充 (2)	第 8 章 主要語を欠く節
第 4 章 倒置	第 9 章 共通関係
第 5 章 同格	第 10 章 挿入と基本要素の識別

同書はその名の通り、極めて体系的に構成されている。伊藤によれば、同書は第 1 章から第 4 章において英文の基本構造、すなわち「S+V+ [X+X]」の構造にかかわる問題を対象としており、第 1 章では基本原理、続く第 2, 3 章ではその原理の拡張を扱い、第 4 章ではその例外として「倒置」の構造を対象としている（伊藤 1964, p. 128）。第 5 章から第 7 章においても「H+M」の問題が網羅的に扱われており、第 9 章から第 10 章ではその二つの原理から生じる個々の問題の組みあわせによる問題を解説している。

このように『解釈体系』においては体系性が非常に重視された構成になっており、1977年に刊行された『解釈教室』においても、こうした特徴は後の『ビジュアル』と比べればそれほど大きく変化してはいない。目次を以下に示す。

Chapter 1 主語と動詞	Chapter 6 同格構文	Chapter 11 修飾語の位置(2)
Chapter 2 目的補語	Chapter 7 It... that...	Chapter 12 比較の一般問題
Chapter 3 that-Clause	Chapter 8 意味上の主語	Chapter 13 比較の特殊問題
Chapter 4 what-Clause	Chapter 9 関係詞	Chapter 14 共通関係
Chapter 5 倒置形	Chapter 10 修飾語の位置(1)	Chapter 15 挿入の諸形式

『解釈体系』と比べると、「目的補語」や「比較」といった学習者が苦手とする個別的な項目が組み込まれ、実際の受験生に対する配慮がなされている。しかしながら、後に見る『ビジュアル』における変化と比較すれば、体系性を重視する姿勢にはそれほど大きな変化がなかったといえる。

その後、『ビジュアル』において大きく構成が変化し、目次は以下のようになる。

1 主語の発見 節 (clause) とは何か	9 名詞+to 不定詞
2 S+V S+V (S+V)	10 意味上の主語
3 疑問詞と名詞節	11 be+p.p.+to 不定詞
4 関係代名詞 (主格)	12 because と for
5 and を見たら考えよ	13 関係代名詞の what
6 関係代名詞 (目的格)	14 V+O+p.p.
7 第5文型 O+C→S+P	15 比較の組み立て
8 関係代名詞の省略 名詞+分詞	(以下省略)

一見して明らかなように、『解釈体系』に見られた体系性は消失している。このような構成をとった理由として、英文の基本原理について「学生に教えるとき、これを最初から表に出してテキストを体系的に組み立てる必要はない」として、「全体の見通しが教師のアタマの中になれば、学生は個々の例題を通して、単純なものから複雑なものへと、知識がラセン状に組み立てられてゆくのが望ましいというのが、最近の僕の考え方であり、Part I と Part II の構成はそうなっていたわけだ」(伊藤 1988, p. 242) と述べている。伊藤は、「S+V+ [X+X]」および「H+M」の基本原理と、節によるその拡張を基本としつつも、そうした知識を学習者に体系的に提示する必要はないという。教師が指導する際に体系的な知識を念頭に置きながらも、学習者は具体的な英文を通じてそれらを学習していくことが望ましいと考えたのである。

伊藤は、「英文解釈の参考書の多くは、これは私がこれまでに書いたものも含めての話ですが、教師の立場で書かれているという限界を持っているのではないのでしょうか」(伊藤 1987, p. iii) と (自己) 批判していることから、こうした構成の変化は、伊藤が「学生の立場」に立つようになったことを反映していることがうかがえる。伊藤は、『解釈教室』の執筆当時には「従来

から重要とされてきた構文や、その存在に気づかれていなかった構文のいかに多くが、『新しい』観点により統一的体系的に説明できるかを誇示することに熱中するあまり、それが果たして学生に必要であるかどうかには思いつかなかった」（伊藤 1997, pp. 54-55）と振り返っている。体系的な記述よりも、学習者にとって必要な「どうやってそういう理解にたどりつくかのプロセスの解明、いや、解明よりそのプロセスに沿った訓練」（伊藤 1987, p. iii）を重視するようになったのである。

そしてその背後には、前節に引き続き再び、幅広い層の受験生を包摂するという目的が見出だせる。伊藤は「現在の私はもう、[資料3]の『英文解釈教室』のような組み立ては、学力が一定水準に達した学生にのみ有効なものであり、大部分の学生には何をいかなる順序で教えようとするか、また現実に教えているかの意識が教員の中にあれば、第一章・主語、第二章・目的語のような教材の組み立てはいらない、いやむしろ余計なものではないかと考えるようになっている」（伊藤 1997, p. 197）という。また、伊藤は受験生への助言として、「せめて『ビジュアル』のパートⅠ、Ⅱぐらいの知識は持っていないと、いきなり『解釈教室』は無理かもしれない」といい（伊藤 1995, p. 86）、『ビジュアル』程度の知識を備えた学習者が『解釈教室』を読むことで、「それまでの平面的理解になかったもの、つまり上空からの展望がふえたことで、理解が飛躍的に深まると述べている（伊藤 1995, p. 89）。『ビジュアル』は『解釈教室』を単に平易にした著作ではなかったものの、体系的知識を整理する以前の英文を読む経験が不足している学習者を意識したものでもあったと考えられる。『解釈体系』や『解釈教室』のような体系的な構成は、すでに知識をある程度持っている学習者にとってはそうした知識を英文解釈のために別角度から再構成できるという点で有益であったかもしれないが、より学力の低い受験生にとっては、そうした体系性がかえって学習を阻害すると考えたのである。

また伊藤は、『解釈教室』を書いた時は、もちろんできるだけ明快に書いたつもりだったからね。難しい、難しいとあちこちで言われるたびに、意外というか、時には心外な感じがしたものだ」と言いつつも、「ただ、今になって見ると、あの本を書いていた時は、こういう角度から見れば英語構文の全体を統一的に示せるということにアタマが向きすぎていた、それを読む学生のことを考えていなかったのがあの本の欠点だね」と反省している（伊藤 1995, p. 88）。『解釈教室』に対する「難しい」という評価を受け止め、体系性を重視しすぎていたことを認めたくて、学習者の視点に立とうとする姿勢が見てとれる。その意味でも、より広い学力層の学習者に対応しようとするものでもあったといえる。

ここまで、参考書の構成に焦点を当てて「構文主義」の変化を検討してきた。次に、英文の解説における志向の変化に対する分析を行う。上で見たように、「構文主義」の基本的特徴は、「S+V+ [X+X]」と「H+M」の二つの原理によってあらゆる英文を分析する点と、和訳を介さず英文を「直読直解」することを目指す点である。この二つの特徴が個々の参考書の中でどのように扱われているかを検討する。

すでに参考書の構成と併せて見たように、『解釈体系』においては「S+V+ [X+X]」と「H+M」の原理とそれによって項目を組織する体系が強く表れている。一方で「直読直解」に関しては、同書の特徴として「言語の線条性の重視」（伊藤 1964, p. iii）をあげているが、それに基づいた解説は少数に過ぎない。『解釈体系』の時点では、その名の通り体系性が重視され、「直読直解」は後景に

退いていた。

『解釈教室』では、『解釈体系』と比べて「直読直解」への志向が強くなっている。同書の「はしがき」では、同書の目的を「英語を形から考える練習、つまり、英語を読んでいるかぎり決してそこから離れることができない基本的な約束を明らかにすることから出発し、その原則に基づいて英語の構造を分析し、読者とともに考えることを通して、英語を読む際に具体的に頭はどのように働くのか、また働くべきなのかを解明すること」（伊藤 1977, p. vii）であるとしている。「原則に基づいて英語の構造を分析」することを手段として、「英語を読む際に具体的に頭はどのように働くか」をその目的としている。「直読直解」を原理と体系よりも優先させているといえる。

しかし、第一の目的を「直読直解」とし、それに対応した記述も見られるものの、『ビジュアル』と比較すればそうした観点が徹底されているとはいえなかった。そのことを『直読直解への具体的な方法の一つの提示』（同書「はしがき」）と名乗るにはこの本は徹底性を欠き、線的方法性〔引用者注：「言語の線条性」のこと〕にこだわることによって開かれる展望がいかに豊かでありうるかについての見通しもなかったこと、それが二十年の歳月を通してふり返った場合の筆者の最大のうらみであった」（伊藤 1997, p. 54）と振り返っている。

このような伊藤の意識の変化を反映し、『ビジュアル』ではすでに見たように全体の構成が大きく変わると同時に、個々の英文の解説もまた「直読直解」が強く意識されたものとなった。例文の解説においては、たとえば、「His servant は文頭の前置詞のついていない名詞ですから、これがこの文の主語。who was...の was に対する主語は who ですから、His servant に対する動詞はまだ現れていません。who の節はどこで終わるか、中心の動詞はどこで出るかを考えてゆくのが、こういう文の読み方」（伊藤 1987, p. 28）のように、文、あるいはその一部を取り出し、その箇所でのどのように思考するべきか、間違えた場合にどのように修正するべきかが詳細に示されている。こうした解説は、上で見た「学習者の立場」に立った全体の構成とも関連している。参考書全体の構成における変化は、英語の構造に関する体系的知識を提示するのではなく、そうした知識を習得するプロセスを提示するものであった。個々の英文の解説における重心の変化においても、俯瞰的に英文を解析するのではなく、受験生がそれを読み解くプロセスが重視されるようになった。こうして、『ビジュアル』は知識の習得のプロセスと英文読解のプロセスという二つの点で、学習者に寄り添うものとなったのである。

このように「直読直解」が重視されるようになった背景には、上でみた伊藤の教育観の変化や受験生の学力多様化があると考えられるが、同時に外的な要因として入試問題の長文化との関連が指摘できる。戦後の英語入試問題は一貫して長文化し、その一方で和訳問題は減少傾向にある。江利川（2011）によれば、『解釈体系』が刊行された 1960 年代前半には 10 数%～20% 程度であった 201 語以上の英文が、『ビジュアル』が執筆された 1980 年代には 80%弱にまで到達している一方で、1960 年代初頭には 40%程度出題されていた 100 語以下の英文の割合は、1980 年代には 5%弱にまで低下した。また、全文和訳問題は 1950 年には 40%ほど出題されており、1953 年には 60%を超えているが、1970 年代後半には 10%以下となったという。このような入試問題の長文化により、短文を緻密に読み解き和訳することが求められた時代とは異なる英文解釈法が要請されたと考えられる。時間内に長文化した英文を読み、設問に解答するには、

英文を日本語を介さずに前から読んでいくこと、すなわち「直読直解」が有効になるだろう。伊藤自身は特に言及していないが、「直読直解」をより前面に出した『ビジュアル』は、長文化した入試問題に対応するためのものでもあったと考えられるのである。

加えていえば、「構文主義」の登場もすでに、入試問題の長文化に対応するものであったと見ることができる。戦前のように出題される英文がごく短い文章であった時代には、「直読直解」の必要はない²。文末まで読んだ上で、日本語に和訳しにくい「熟語」・「公式」を見抜くだけで済んだのである。しかし、戦後に入り入試問題が長文化していくにつれて、「熟語」・「公式」の知識を習得することと、英文を試験時間内に読んで設問に解答することの懸隔は大きくなっていく。こうした環境の変化の中で「構文主義」が生まれたのだといえる。

本節では伊藤の「構文主義」の特徴とその変化を検討した。第一の変化は参考書全体の構成である。知識を網羅的・体系的に提示するのではなく、そうした知識を学習者が学習する際のプロセスに即した配置がとられるようになった。第二の変化は英文の解説における力点である。英文を俯瞰的・分析的に少数の原理で解説していた前期から、学習者がどのように思考すればそうした英文を読めるようになるかという問いに答えるべく、「直読直解」に重きが置かれるようになった後期への変化があった。どちらも伊藤が学習者の視点に立つことを意識するようになったことによる変化であるが、第一の変化は受験生の大衆化、第二の変化は入試問題の長文化と関連して理解することができる。「構文主義」もまた、英語教育外部の変動の影響下で変化を遂げたと考えられるのである。

4. 「伊藤以後」の英文解釈法

ここまで、「伊藤以前」の英文解釈法から前期「構文主義」、さらに後期「構文主義」への推移を明らかにしてきた。その「構文主義」は後に続く英語講師によって強く意識され、それを乗り越えようとする試みが数多くなされてきた。本節では、伊藤の「構文主義」がそうした英語講師にどのように批判・継承され、その中からどのような英文解釈法が立ち上がってきたのかを、予備校講師による著作を中心に検討する。資料および講師の選定については、『解釈教室』（1977年）以降に刊行された英文解釈・読解を扱う学習参考書を可能な限り収集し、その中で、著者個人の指導観が明確に表れており、伊藤和夫あるいは「構文主義」に言及している参考書、あるいは「構文主義」に類似した方法を用いている参考書を対象とした。

伊藤以後の英文解釈法の一つの類型として、「構文主義」から直接的に影響を受けていると思われるが、「構文主義」よりも受験生が取り組みやすい方法を提示するものがある。富田一彦は、文法による説明をもとに、「文それぞれの意味を正確に理解し、それを積み上げて全体を理解する」（富田 1994a, p. 5）ことによる英文読解を重視しており、それを「読解の原則」として法則化して提示している点は『ビジュアル』との共通点がみられる。他方で、富田は「英文は、まずピリオドまで目を通してから読解作業にかかること。決して一部だけで何かを考えてはいけない」（富田 1994a, p. 27）と述べており、英語を「直読直解」することを目指した伊藤とは英文読解に対する姿勢が大きく異なっている。また、伊藤は英文読解の「ルール」と題した少数の規則を提示し、その少なさを利点として強調している³（伊藤 1987）のに対し、富田は 100 個の「読解の原則」を提示し、細かく読解法を分類している（富田 1994a）。

葉袋善郎は「Frame of Reference」という独自の枠組みにより、英文を個々の単語に「品詞分解」して構造を理解する方法を示している（葉袋 1995）。「自分の頭の働きを意識的にコントロールしながら多くの英文を読んで」（葉袋 2000, p. 297）いくことで最終的に意識せずに英文を正しく読み解くことを目指しているという点で伊藤との共通点はあるが、文中の個々の単語を詳細に分析し、品詞や働きを指摘することを求める姿勢は、「一文一文、一語一語について分析的な教え方をすること」（伊藤 1997, p. 71）に批判的な伊藤とは異なるものである⁴。

これらは、「構文主義」の一側面、すなわち英文の読み方を一般化・法則化し、それを明示的な方法として提示するという性格をさらに強調し、英文読解の過程を具体的な操作に落とし込むことで、より多くの学習者にとって扱いやすい方法を示している。富田は「英語が決して密教の秘技ではなく、誰にでも理解できる民主的な知識体系に過ぎないことを生徒諸君に伝えよう、と思った」（富田 1994b）と述べている。また、葉袋は『解釈教室』について、「例文が難解なことと分量が多いこと、そのわりに解説があっさりしすぎていて、かなりの力がないとつらいと思います」（葉袋 1999, p. 136）と述べており、葉袋が自身の方法論を『解釈教室』よりも取り組みやすいものだととらえていたことがわかる。こうした受験技術の細分化・明示化の流れは、竹内（1991）のいう受験の脱神秘化に相当する。竹内は、受験が大衆化した「受験の脱モダン」の時代においては、予備校が秘儀的な儀式であった入試を暗号解読ゲームへと変換するという。「構文主義」から影響を受け、「構文主義」よりも「受験テクニック」的側面を強めた英文解釈法は、より取り組みやすく、具体的な手続きを示す脱秘儀的な方法を提示することで、より多くの受験生を包摂しようとしたといえる。

また、「伊藤以後」に現れた英文解釈法の類型として、一文の解釈を超えて、文章を読むための方法を提示するものがある。太庸吉は、伊藤が「英文を1文1文正確に読む方法論」を確立したことを評価した上で、「1980 年半ば、大学入試英語問題の長文化と問題量の増加が顕著になり始めた頃に予備校講師になった私が痛感したのは、1 文を体系的・構造的に読むだけではなく、複数の文から成り立つパラグラフ内部の構成、複数のパラグラフから成り立つ文章全体の構成をどのようにして捉えたらよいのか、ひいては文脈を追いかけるとはどういうことなのか、という点であった」と述べる（太 2009, p. iii）。太は同書で「表現リレー」という概念を主軸に据え、「旧情報」と「新情報」の観点から「情報展開」を分析することで、文章の構成を解説している。

また、西きょうじは『ポレポレ英文読解プロセス 50』において、「Frank talks …… この時点で、Frank が主語（S）で、talks が動詞（V）と考えるのは自然なことです」（西 1993, p. 4）、「この文が、Among（前置詞）から始まっていることに気づいたでしょうか。すると、例題2で説明したプロセス通り考えて、どこまでが前置詞句かを決定しようと思うはずです」（西 1993, p. 8）といった解説を行っており、「構文をつかむということは、あくまでも英文を左から右へと読み進むことを前提に文の構造をつかみ内容を把握することなのだというのを忘れてはいけません」（西 1997, p. 32）と述べるなど、「構文主義」と同じく英文の「直読直解」を目指す姿勢を見せている。西はさらに、「文法、構文は、単語→文をつなぐルールであって、その次の段階として文→文章をつなぐルールがある」という（西 1997, p. iii）。『情報構造で読む英語長文』において、「情報構造を意識して文章の流れをつかむことを主眼と」したといい（西 2002, p. 3）、

「結論を述べたら理由説明がくる」など「情報予測」の重要性を示しており、文章のレベルで「直読直解」を目指したのだといえる。

佐々木和彦は、「構文・文法は、おもに、1文を抽出して情報を吟味するためのルールです。そのルールだけを利用しても、スムーズに文を読むことはできません。むしろ、立ち止まって考え込んでしまうことにもなりかねません。しかし、そのルールに、『前後の情報の流れをとらえるためのルール』を加えれば、スムーズに英文を読み、スムーズに英文の意味を理解できるようになるのです」（佐々木, 2003, p.3）と述べ、「情報構造」に焦点を当てた読解法を提示している。「構文主義」のような英文解釈法を前提としたうえで文章の読み方を「情報構造」によって説明しようとしている点で、太や西と共通している。

ここで見たのは、「情報構造」を用いて文章の構成を説明し、文章のレベルで「直読直解」を目指す英文解釈法の類型である。伊藤が「構文主義」により確立した一文の解釈法を前提とし、それを発展させようという試みであるといえる。

同様に文章の構成に焦点を当てる英文解釈法に、パラグラフの構造を重視するものがある。表三郎は、従来の英文解釈法には「単熟語・公式重視主義」と「構文主義」の二つが存在し、自らは「構文主義を徹底したうえで、英文の内容理解という最終目的を重視」（表 1991, p. i）するのだといい、その立場を「ポスト構文主義」と称した。表の英文解釈法は「センテンス」に焦点を当てた「構造分析」に加え、「文と文の関係」に焦点を当てる「パラグラフ」と「パラグラフの相互関係＋文章と背景の現実との関係」を扱う「テキスト」の視点を含んでいる。表は予備校講師となった際に『解釈教室』を読み込み、それを批判する形で自らの英文読解法を作り上げたのだという（表、著者によるインタビュー、京都、2017年8月26日）。

今井宏は『解釈教室』が出版されたことで「構文主義」が塾や予備校の指導に定着したことについて、「初級者が中級者になるには、この方法がベスト」だと評価するが、「この方法には『中級者どまり』という致命的な欠点」があるといい、「読解に時間がかかりすぎ、制限時間内に読みきることができない」、「一文一文の訳はできるが、長文全体の論理構造がつかめない」という問題点を指摘し、「スピード」と「マクロの視点」を重視し、文章全体の論理構成に焦点を当てる「パラグラフ・リーディング」という方法論を提示した（今井 1999, pp. 2-5）。また、今井がそうした読解法を示した背景には、伊藤への反発心があったという（今井 2008）。

横山雅彦は、「駿台（予備学校）の構文主義に見られるように、文法構文の段階でチマチマしてしまっていて、ロジックまでいかなかった」（横山 2005, pp.12-13）と「構文主義」を批判し、英文読解にディベートの考え方を応用したという「ロジカル・リーディング」を提示している。

このように、伊藤の「構文主義」の意義を認めた上で批判し、文を超えて文章を読み解くための様々な英文解釈法が提示された。この背景には、前節での分析と同様に入試問題の長文化が原因として見出だせる。とくに1990年代には、慶應義塾大学総合政策学部・環境情報学部の「超長文」問題（トフルゼミナール英語教育研究所 1997）に代表されるように、入試英文の長文化傾向が続いていた。今井が「皆さんは今、大量の英文を制限時間内に読みきって、しかもその制限時間内に大量の問題を解かなければならない、という立場に立たされているんです」（今井 1999）と述べるように、こうした入試問題に対応すべく、文章の構造を説明し、長文を速読する方法が受験対策において求められたのだと考えられる。

本節では、「伊藤以後」の英文解釈法の特徴を検討した。多くの講師が伊藤あるいは「構文主義」に言及した上で自らの方法を提示していることから、その存在が「受験英語」の世界においていかに大きかったかがうかがえる。この「構文主義」の系譜に連なる参考書群は大きく二つに分類することができる。一つは、「構文主義」のように英文を分析的に読む方法を提示しているが、その手続きを具体的に明示することで、より多くの学習者を包摂しようとするものである。もう一つは、情報構造やパラグラフの構造に焦点を当て、文ではなく文章の構造を分析するものである。前者は受験生の増加に、後者は入試問題の長文化に対応しており、そうした外的環境への適応として現れたのだといえる。

最後にもう一つ、受験大衆化以後の予備校における英文解釈法の展開に影響を与えてきた要因を検討したい。それは、予備校という空間における差異化の圧力である。予備校講師は生徒による授業アンケートによって評価される（丹羽 2004）。主にそのアンケート結果によって、次年度の待遇などが決定するのである。したがって、講師は様々な手段を駆使して、自らの提示する技術や知識、学習法が他の講師のものよりも優れているかを提示し、生徒からの支持を得なければならない（藤村 2019）。

予備校という環境では、入試合格において他の方法よりも有効だと生徒からみなされる技術や知識を提示することが、差異化の主要な手段となる。すでに述べたように、受験指導においては、受験生が入試で出題される初見の英文を読み、設問に解答できるようになることが求められる。ゆえに、一貫した方法によってあらゆる英文を読むことができる、という確信が得られなければ、受験生はその授業や参考書に満足しない。そうして、英語講師は一般性の高い英文解釈法を生み出し、生徒へと提示する競争へと駆り立てられるのである。本節でみた「伊藤以後」の英文解釈法に固有の名称がつけられているものが多かったことも、それがいかに特別なものであるのかを生徒に印象づけようとするものであるといえるだろう。そうした差異化の試みの中で、「受験英語」における大きな存在であった伊藤の「構文主義」に対して、一方では、「構文主義」と多くの点で共通点を持ちつつも、より平易で多くの受験生に受け入れられる方法を提示する講師が現れ、他方では「構文主義」が十分に対応できていなかった長文の読解法を提示する講師が現れた。市場原理の働く予備校という空間が、「受験英語」における英文解釈法の展開を要請したともいえるのである。

5. おわりに

本稿では、伊藤和夫の「構文主義」を中心にして、「伊藤以前」の英文解釈法から「構文主義」、前期「構文主義」から後期「構文主義」、「構文主義」から「伊藤以後」の英文解釈法への展開を跡づけた。新たな英文解釈法が提示される際に先行する英文解釈法の何が問題視されていたのかを検討し、英文解釈法の展開に影響を与える外的要因を示した。そこでは、受験生の増加による学力層の多様化と、入試問題の長文化への対応が絶えず意識されてきた。こうした分析からうかがえるのは、環境の変化に対応して形を変えてきた「受験英語」における英文解釈法の姿である。加えて、「受験英語」における新たな英文解釈法は主に予備校講師によって生み出されてきたが、講師が予備校においてそれを行う動機づけとして、講師の雇用形態が生じさせる差異化競争の存在を指摘した。受験産業である予備校やそこで指導される受験技術は、生徒

や入試問題の変化に対して従属的であり、外的環境の変化に応じることができなければ市場原理によって淘汰される。講師もまた同じである。この市場原理への対応が「受験英語」という領域で英文解釈法を展開させてきたといえる。

これまでの英文解釈法にかかわる研究では、個々の方法の特徴や英語教育上の意義を明らかにすることに重きが置かれてきた。これに対し、「受験英語」における英文解釈法を分析対象として、その批判・継承の関係を、大学進学をめぐる社会状況や入試問題の変化といった外的な要因との関連で検討したことに本研究の意義がある。「受験英語」は日本の英語教育に大きな影響を与えてきたにもかかわらず、学校英語教育と比較すれば、十分にその特徴が明らかにされてきたとはいいがたい。今後さらなる研究の発展が期待される。

注

- 1) 文献で確認される限り、伊藤自身は「構文主義」という言葉を使用していない(藤村 2019)。本稿 4 節で検討したように、後の世代の英語講師が伊藤の英文解釈法に(主に批判的に)言及する際に用いている。本稿では、そのように「構文主義」という言葉が広く認識されていることを踏まえ、伊藤による英文解釈法を「構文主義」と呼ぶ。
- 2) 江利川(2011)は、戦前と比較した戦後の大学入試問題の特徴の一つとして「長文化」をあげている。
- 3) 伊藤は「ルールは少ないのが値打ちだね。ルールは記憶の対象じゃなくて、英文を考えるための道具だから、少なければ少ないほどいいわけだ」と述べている(伊藤 1987, p.64)。
- 4) 伊藤は「学校英語の文法軽視の反動として、巷では、こういう形で一文一文、一語一語について分析的な教え方をすることが、意外に深くひろがっており、しかもそれは学校での英語をとらえどころのないものとしか感じられない一部の学生に結構受けているのである」と述べ、このような指導法を「本来は無意識による抑制の世界の中で行なわれるべき活動を過度に意識する努力はかえって英文を読めなくしてしまう」として批判している(伊藤 1997, p.71)。

参考文献

- 秋山仁, 1997, 「君と僕とはランタン相照らす仲」『現代英語教育』1997年5月号, pp.16-17.
- 江利川春雄, 2011, 『受験英語と日本人——入試問題と参考書からみる英語学習史』研究社.
- 藤村達也, 2019, 「伊藤和夫の『受験英語』教育における『教養主義』:『構文主義』との関係から」『日本英語教育史研究』第34号, pp.131-148.
- 速川和男, 1990, 「英語学習参考書の研究——英文解釈参考書の系譜(1)——小野圭次郎——」『日本英語教育史研究』第5号, pp.159-181.
- 速川和男, 1993, 「英語学習参考書の研究——英文解釈参考書の系譜(2)——」『日本英語教育史研究』第8号, pp.161-179.
- 今井宏, 1999, 『今井の英文読解 パラグラフリーディング(Ⅰ) スーパー速読編』代々木ライブラリー.
- 今井宏, 2008, 「Tue 080902 伊藤和夫先生のこと 不肖の息子のその後」, 風吹かば倒るの記,

- 2008年9月5日, (2021年1月1日取得, <http://ameblo.jp/imai-hiroshi/entry-10429449312.html>).
- 入不二基義, 1995, 『英文解釈教室』というマイクロコスモス——伊藤和夫著『英文解釈教室』を解釈する『高校英語研究』1995年3月号, pp.1-10.
- 入不二基義, 1997, 「二つの頂点——『英文解釈教室』と『ビジュアル英文解釈』」『現代英語教育』1997年5月号, pp.12-17.
- 伊藤和夫, 1964, 『新英文解釈体系』有隣堂.
- 伊藤和夫, 1977, 『英文解釈教室』研究社出版.
- 伊藤和夫, 1987, 『ビジュアル英文解釈 PART I』駿台文庫.
- 伊藤和夫, 1988, 『ビジュアル英文解釈 PART II』駿台文庫.
- 伊藤和夫, 1995, 『伊藤和夫の英語学習法』駿台文庫.
- 伊藤和夫, 1997, 『予備校の英語』研究社出版.
- 太庸吉, 2009, 『英文精読へのアプローチ』研究社.
- 丸山眞男, 1995, 「勉学についての二、三の助言」『丸山眞男集 第四巻』岩波書店, pp.155-168.
- 葉袋善郎, 1995, 『英語構文のオリエンテーション』駿台文庫.
- 葉袋善郎, 1999, 『TIMEを読むための10のステップ』研究社.
- 葉袋善郎, 2000, 『英語リーディング教本』研究社.
- 西きょうじ, 1993, 『ポレポレ英文読解プロセス 50』代々木ライブラリー.
- 西きょうじ, 1997, 『英文速読のナビゲーター』研究社.
- 西きょうじ, 2002, 『情報構造で読む英語長文』代々木ライブラリー.
- 丹羽健夫, 2004, 『予備校が教育を救う』文藝春秋社.
- 表三郎, 1991, 『スーパー英文読解法 上』論創社.
- 佐々木和彦, 2003, 『佐々木和彦の 英語長文が面白いほどとける本』中経出版.
- 竹内洋, 1991, 『立志・苦学・出世』講談社.
- 谷明信・西村公正, 2006, 「いわゆる受験英語『構文』・『公式』の系譜——『難問分類英文詳解』と『新々英文解釈研究』(9訂版)の『構文』比較——『実技教育研究』第20号, pp.19-26.
- トフルゼミナール英語教育研究所, 1997, 『英語難関校受験シリーズ 慶應 SFC の英語』ティエス企画.
- 富田一彦, 1994a, 『富田の[英文読解100の原則] 上』大和書房.
- 富田一彦, 1994b, 『富田の[英文読解100の原則] 下』大和書房.
- 外山滋比古, 1979, 「英文解釈法」『現代の英語教育 第5巻 読む英語』研究社.
- 山崎貞, 1925, 『新々英文解釈研究』研究社.
- 横山雅彦, 2005, 『横山ロジカル・リーディング講義の実況中継』語学春秋社.

(教育文化学コース 博士後期課程1回生)

(受稿2020年8月31日、改稿2020年11月10日、受理2020年12月7日)

「受験英語」における英文解釈法の歴史的展開

ー伊藤和夫の「構文主義」を中心にー

藤村 達也

本稿は、「受験英語」における英文解釈法が歴史的にいかに関係してきたのかを、入試問題や受験生の変化といった英語教育に対する外的要因によって説明することを試みるものである。その際、「受験英語の神様」と呼ばれた英語講師、伊藤和夫による英文解釈法である「構文主義」を中心に分析した。「構文主義」以前に主流だった英文解釈法は、日本語に訳しにくい「熟語」・「公式」の暗記が中心であった。「構文主義」はこれを批判し、英文を体系的に分析する原理と、英文を「直読直解」する視点を提示し、後に「構文主義」は後者を重視するようになった。「構文主義」の登場以後は、これを批判的に継承する様々な方法が現れた。こうした展開全体を通じて、受験生の多様化および入試問題の長文化という外的変化の影響が見られることを指摘した。また、「受験英語」において様々な英文解釈法が生まれる原因として、予備校における講師間の卓越化競争の存在を指摘した。

A Historical Analysis of English Interpretation Methods for University Entrance Examinations in Japan

FUJIMURA Tatsuya

This paper discusses the historical development of methods of English interpretation for preparation for university entrance examinations in terms of social and institutional factors, focusing on an English teacher at Sundai Preparatory School, Kazuo Ito, whose English interpretation methods called *Kobun-shugi* had a large influence on learning and teaching English for exams (*juken-eigo*) in Japan. By comparing Ito's method and methods that came before and after, it is shown that English interpretation methods have developed along with the growing number of students moving to higher education, and with the gradually lengthened English texts on entrance examination questions. In addition to these factors, the competition among English teachers at preparatory schools for excellence has brought about the variety of English interpretation methods in Japan.

キーワード：伊藤和夫、英文解釈法、受験英語

Keywords: Kazuo Ito, English interpretation methods, English teaching and learning for university entrance examinations (*juken-eigo*)